「らんまん」牧野博士が愛した庭

今も多くの人に親しまれ

ＮＨＫの連続テレビ小説「らんまん」で、主人公のモデルとなった植物学者、牧野富太郎博士。その朗らかな性格や植物への純粋な愛情から、全国でマキノブームが起きている。東京では、富太郎が94歳で亡くなるまでの約30年間を過ごした住居と庭の跡地が、練馬区立牧野記念庭園として公開されている。約３００種類の植物があり、富太郎が慈しんだ庭のほか、採集した植物を持ち帰るカバン「胴乱」など遺品や資料で富太郎の一生を振り返る記念館、書斎を再現した展示室がある。

富太郎は神戸とのゆかりも深い。困窮し、大切な植物の標本を売ろうとした一時期に神戸の篤志家、池長孟（はじめ）の援助で、神戸に植物研究所が設立された。そんな富太郎の足跡を訪ねて紹介したい。

（神戸新聞東京支社編集部長　小西博美）

牧野富太郎博士が約30年間暮らした住居と庭の跡地に造られた練馬区立牧野記念庭園＝東京都練馬区東大泉6

緑と太陽があふれる庭 残暑の中マキノ熱も沸騰

強い日差しが照りつける8月半ば、牧野記念庭園を訪ねると、タオルで汗を拭きながら学芸員の話を聞いて園内を巡る大勢の人に圧倒された。こんなに多くの人が牧野富太郎の植物園ともいえる庭園に心を寄せていることに驚く。

こぢんまりとした入り口をくぐると豊かな緑の木々が広がる

庭園は約２６００平方メートル。富太郎が命名し、九州の知人から苗を取り寄せて植えたヘラノキや、庭園内で一度は途絶えたものの、以前に贈った高知県立牧野植物園から再送してもらって植えたヒメアジサイなどが楽しめる。富太郎が好きだったサクラは春になれば10種類が花を咲かせる。中でも「仙台屋」と呼ばれるサクラは、高知市内にあった仙台屋という店の前に咲いていた品種で、富太郎が名付けた。淡紅紫色の花びらが美しいという。

マキノブームも手伝って、多くの人が園内の植物を巡る教室に参加していた

こぢんまりした園内は緑にあふれ、今も富太郎がルーペを持って現れそうな、ゆったりした空気が流れている。庭園の一角には、富太郎の胸像があり、富太郎が妻・寿衛に感謝と愛情を込めて名付けたスエコザサが周囲を囲む。風が吹くとさやさやと懐かしい音をたてるササに、妻の面影を重ねたらしい。顕彰碑や歌碑の周りにも植えている。

富太郎は高知県生まれ。独学で植物学を志し、生涯に発見・命名した植物は１５００種類以上に上り、「日本植物学の父」と呼ばれた。東京帝国大理学部（現東京大）の講師を47年間務め、「植物研究雑誌」や「牧野日本植物図鑑」を刊行した。永眠後の１９５７年、文化勲章が送られた。

会社員から転身し顕彰の道へ 学芸員らの地道な努力実る

〜言葉足らずの愛を
〜愛を貴方へ…

朝ドラ「らんまん」で毎朝、あいみょんが歌う「愛の花」。主人公のモデル牧野富太郎のひ孫、一浡（かずおき）さん（77）は最初のうち、この曲が流れるたびに目がうるんだという。

会社員だった一浡さんが、庭園の運営に関わるようになったのは14年

富太郎のひ孫一浡さんは庭園の学芸員を務めている

富太郎の妻寿衛にちなんで名付けられたスエコザサが胸像を取り巻くように茂る

前。江戸から明治期の植物のスケッチや写真など4千点に及ぶ富太郎の資料が出てきたからだった。これら貴重な資料を研究し、顕彰するため、学芸員を置くなど体制をも整えてほしいと練馬区に相談。自らも学芸員の資格を取った。

生誕160年を機に、復元された富太郎の書斎

ペンにライト、原稿…。
富太郎がさっきまで作業をしていたかのようだ

ちょうど、老朽化した建物を建て替える話もあった。そして2010年、東京国立博物館資料館から田中純子さん（59）ら学芸員を迎え、同園はリニューアルオープン。その後、資料の整理・確認やデジタル画像の公開、企画展の展開などを通して富太郎の名を広めた。一淳さんは「富太郎を顕彰する上で朝ドラは一つの到達点。これだけたくさんの人が知ってくれてうれしい。でも、それを支えたのは学芸員の地道な努力」と話す。

田中さんによると、時代的な背景もあるが、富太郎は筆まめだった。幸運なことに、富太郎からもらった手紙やはがきを何十から数百通単位で子孫の方が残しており、それらを通した研究も進めている。例えば、札幌農学校（現北海道大）の宮部金吾氏への書簡では、帝国大理科大学植物学教室の松村任三教授との折り合いの悪さや自らの不遇、標本や執筆にまで話は及ぶ。手紙はまさにその時の感情がにじむことが多く、自伝より詳細に分かることがあるのだという。田中さんは、これらの研究を著書「シン・マキノ伝」（北隆館）にまとめている。

生誕160年機に書斎復元 愛用の剪定バサミも復刻

昨年は富太郎の生誕160年だった。これを機に園内に書斎を再現。練馬区が「みどりの葉っぴい基金」として「牧野記念庭園書斎再現プロジェクト」の資金を募ったところ、目標額を上回る528万円近くが集まった。

一淳さんが5、6歳の頃に見た富太郎をイメージ。蔵書の表紙を高精細カメラで撮影したり、残された写真からデザイナーが色鉛筆で手描きしたりして、当時富太郎が座っていた机の周りに本を所狭しと積み上げた。ちなみに、2階にあった最初の書斎は、本が重すぎて床に穴があき、障子も曲がったという。

机の上にも、ライトやのり、ペンなど愛用の品を配置した。富太郎は自分の持ち物に対する愛着が大変強かったようだ。

復元の仕上げに、「繇條書屋（ようじょうしょおく）」と書かれた額を飾ると、スタッフから自然と拍手が沸いた。繇條とは草木が生い茂るという意味。富太郎は30回以上も引っ越しを重ねたというが、この額は決して手放さなかった。

こだわりの品の一つに、富太郎が植物採集の時に使っていたヘンケルスの剪定（せんてい）バサミがあった。一淳さんが、復刻を提案したところ、ヘンケルス製品を扱う「ツヴィリング J. A. ヘンケルスジャパン」が応じた。富太郎が切れ味と使い心地を絶賛した愛用品が「マキノエディション」としてよ

復刻された富太郎愛用の剪定バサミ

トレードマークとなった胴乱など富太郎の遺品や資料を紹介する展示室

みがえり、限定5千本が販売されている。

このほか、常設展示室では、胴乱やめがね、ピンセットなど愛用の道具や執筆した書物、解説パネルなどで富太郎の仕事をたどることができる。企画展示室では、富太郎や植物に関する企画展が開かれている。

忙しい富太郎に遊んでもらった思い出はあまりないという一浡さん。だが、親世代は植物採集にも同行していたという。「富太郎と一緒に採集に行きたかったし、楽しい講話も聞きたかった。植物の普及に一生懸命だったあの頃の一場面にいたかった」と悔しがる。

一浡さんの叔母にあたる、富太郎の次女鶴代さんは、富太郎が毎朝ブラジルコーヒーを飲み、フランスパンにバターを塗って食べていたのを覚えていたという。「コーヒーを飲みながら、図鑑をどういう構成にしようとか考えていたんだろう」（一浡さん）。庭園ではその同じコーヒーが味わえる。緑に囲まれて口にする、苦みの利いた味に暑さを忘れた。

神戸の篤志家が支援の緑 研究所跡地を公園に整備

富太郎と神戸との縁は、富太郎が50台半ばのころにまでさかのぼる。植物界への貢献は大きかったものの、不遇だった富太郎は困窮のため、植物学者にとって命より大切な標本を売ろうとするところまで追い詰められた。その窮状を救ったのが、神戸の大学生、池長孟だった。池長の支援で1918年、神戸市兵庫区に標本を収める植物研究所が創設された。結局、研究所は一般に公開されることはなかったが、標本の散逸を防ぎ、関西での植物研究や交流を広げるなど一定の役割を果たした。

その跡地は会下山小公園（神戸市兵庫区会下山町2）として、記念碑やベンチが置かれ、スエコザサなど富太郎ゆかりの植物もある。ドラマをきっかけに、神戸市中部建設事務所は研究所をイメージしたあずまやを塗り直したり説明板を新装したりしたほか、新たに植物も加え、園路をライトアップした。

記念碑は、研究者らしく図鑑のような分厚い本の形に功績が記されている。定宿にしていた「会下山館」の門柱がベンチとして置かれている。

市街地を一望できる会下山小公園を地元自治会は「牧野公園」、公園に続く坂を「牧野坂」と命名。約100人が交代で水まきや草引きを担う。会下山町公園管理会の吉岡伊勇会長（83）は「地元でも知らない人が多かったが、これを機に牧野公園を知ってもらい、盛り上げていきたい」と意気込む。

ちなみに兵庫県の花ノジギクも富太郎が命名した。富太郎は若い頃に高知県吾川郡仁淀川町でノジギクを発見した後、姫路市大塩一帯で群生する素晴らしいノジギクと出合ったと、牧野記念庭園で開催中の企画展「牧野富太郎　草木とともに」で紹介されている。富太郎の功績は全国におよび、兵庫県との縁も深かった。

植物研究所の跡地だったことを示す記念碑＝会下山小公園

研究所をイメージしたパーゴラと、新たに置かれたベンチ

〈参考文献〉「シン・マキノ伝」（田中純子著、北隆館）